留萌農業改良普及センター外部評価報告書

留萌振興局産業振興部農務課
留萌農業改良普及センター

留萌農業改良普及センターの普及指導活動を効率的・効果的に展開し、今後の普及活動に生かすことを目的に、外部の有識者や専門家による評価を実施したので、概要を報告する。

１　日時及び場所

（１）日時　　令和５年７月５日（水）13 時 30 分から 15 時 30 分
（２）場所　　留萌振興局　２階　講堂

２　評価員

職種	所属
先進的農業者	るもい指導農業士・農業士会
民間企業（食品加工）	(株)フタバ製麺
民間企業（食品加工）	(株)丸タ田中青果
民間企業（酒造）	国稀酒造（株）
学識経験者	北海道遠別農業高校

３　評価対象課題

留萌農業改良普及センターで実施している課題のうち、次の３課題を評価対象課題に選定した。

（１）重点課題
ゆとりある豊かな地域農業の確立（増毛町別苅地区 10 戸）
（２）地域課題
地域農業の担い手育成支援
（３）広域推進事項
農商工連携による農畜産物の生産販売の振興

４　評価方法

（１）評価
パワーポイントを使用して各担当から具体的に説明を行い、評価表で評価を受けた。
評価は、「地域の課題・ビジョン・活動目標の明確化」、「対象地域との共通認識・合意形成」、「農業者・地域のニーズと波及効果」及び「活動方法」の４項目に「総合評価」を加えた全５項目を５段階【５点（非常に優れている）、４点（優れている）、３点（妥当である）、２点（改善が必要）、１点（特に改善が必要）】で行った。
（２）活動に対する意見・要望等
５段階評価とあわせて、地域の農業・普及活動について評価員との意見交換を行った。

5　評価結果

（1）評価の概要

各課題に対する評価は、３点（妥当である）から４点（優れている）とする評価が多く、活動は概ね理解されたと考える。

（2）評価の詳細

①重点課題

地域の課題・ビジョン・活動目標の明確化	対象地域との共通認識・合意形成	農業者・地域のニーズと波及効果	活動方法	総合評価
3.8	3.4	3.6	4	3.7

※評価員５名の平均点

【意見・質疑・感想等】

○「次代を担う水稲を基幹とした地位農業の確立」という大きなタイトルの取り組みを令和３年から令和７年まで行う中で、年度ごとに中身を少しずつブラッシュアップしていくようなことも含まれているのか。

→　含まれている。

通常の普及活動もそうであるが、春に１年間の普及計画を立てて、年度末に１年間の成果をまとめている。

その結果を基に次年度の計画を作成し、活動をしていく、という流れである。

重点課題については、５年ごとの活動であるので、５年間の計画と１年ごとの計画を立てて活動を行っている。

○土壌診断の結果を取り組みとして反映している農家が１戸増えているとのことだが、例えば令和７年度には、10 戸に取り組んでほしいというような目標があり、それに向けて進んでいる、ということか。

→　適正施肥を実践する農家を増やしていきたいというのもあり、今後も取り組む農家戸数が増やして行ければ良いと考え、取り組みを行っている。

○今年は米の病気や生育について、普及センターから説明を頂いたところ。

本業は酒造であるが、与えられた米から作るだけでなく、そういった説明を聞いたことにより、非常に勉強になり、やりがいを感じた。

今後も一緒に頑張っていけたら良いなと考えている。

○水張りの維持が本当に必要なのか、また他の作物への転換も必要なのかという大きな課題があると思う。

そういった部分を地域の方から課題として上がってこなくても、逆に普及センターの方からこういった課題もあるのではないか、といったような提案が必要である。

○労働環境の改善の中で、直播というのは、今後の農業の主体となるようなものなのか。

→　省力化された直播栽培は、年々面積が増えている。

20 年くらい前はほとんどなかったが、直近だと道内でも 3,000 ha以上の面積で直播栽培が行われている。

直播栽培は収量が良くないというイメージがあるが、新品種や技術の向上により移植栽培の収量や品質に近づいてきていると思う。

今後、さらに技術が向上していけば、移植栽培に代わる水稲の栽培技術になっていくと思っている。

○別苅地区 10 戸の半数以上が 70 代以上ということで、70 代を超えると担い手の話が出てくると思う。

水稲だと年に１回の収穫なので、20 歳から農業に従事したとしても 70 歳で 50 回しか収穫をできない、という話を耳にする。

普及センターには、次代の担い手のために記録を積み重ね、参考書のようなものを残していただきたい。

○高齢化を踏まえながら活動しなくてはいけないのは非常に大変だと思う。

例えば土壌の取組に関しても、高齢の方の中には、自分たちがいつまで、どこまでやっていいのかと考えている人もいると思う。

②地域課題

地域の課題・ビジョン・活動目標の明確化	対象地域との共通認識・合意形成	農業者・地域のニーズと波及効果	活動方法	総合評価
4	3.8	3.6	4.2	3.9

※評価員５名の平均点

【意見・質疑・感想等】

○昨年、落花生の関係で若い農業者と話をする機会があったが、農業に熱意と誇りを持っており、人数が少なくても留萌管内の農業は明るいものだなと思った。

私たちのような商売人も跡継ぎ問題に直面しており、人数が少ないからこそ農業以外の職種も含め、担い手が交流できる場所があれば良いと思う。

○参加している方の強み・弱みや集団の特徴や個性は何か。

→　強みは、非常に積極的で色々なものに挑戦しようというところがある。

一方で水稲が中心の地域で落花生などをやってみたいと思っても、尻込みすることがあり、前向きではあるが少し背中を押してあげる必要がある。

○我々の年代と青年の年代を比較した際に農業や地域振興に対する危機感の温度差はあるか。

→　口では大変だと言うことはあるが、我々の年代が感じる危機感とは少し違う感じがする。

危機感を持ちつつも、それを打破しようという勢いがあるので、我々もそれを汲み取って支援していくことが大事だと思う。

○冬にある発表会に２年ほど出席させてもらって、若い人たちが一生懸命勉強して頑張っていることを肌で感じているので、このまま継続していってほしい。

○お願いとして、先輩農家や高齢の方も若い人が何をやっているか遠巻きに見ている。
　自分の考えを話したいという先輩農家もいると思うので、若い人と先輩農家が交流できるような機会を設けて頂ければ協力したい。

○南地区年齢別の従事者ということで表を見ると、３５歳未満は留萌市ゼロ、小平と増毛が少しいるが、圧倒的に６５歳以上が多い。
　この６５歳以上の方の身内で後を継ぐという意思がある人はどれくらいいるか。
→　農家はきつい、汚いとよく言われ、農家に生まれたから農家が適しているわけではないので、他にやりたいことが見つかると家を出る。
　昔のように農家に生まれたから農家を継ぐというより自由意志が尊重されるようになった結果、若い人が少なくなっている。

○６５歳以上の方は跡継ぎについてどういう考えを持っているか。
→　高齢化が進むと労働力の軽減などで１戸あたりの面積が増え、小規模農家が減っていくと思う。
　水稲だけで小規模で経営することは厳しい状況にあるため、野菜などの作付に転換するなど、規模の面で集約されていくと思う。

○牛を２頭程度飼い、チーズを売って非常に費用対効果が良い経営を行っている農家を知っている。
　農家もたくさん土地があって、ただ作ればいいだけじゃなく、夢や希望、質を求めることの普及も大事なのかと思った。

○４Ｈクラブの方で村おこしのようなことをやっているとのことで、そういった取組はやる気に繋がるので、提案型の普及を推進してほしい。

③広域推進事項

地域の課題・ビジョン・活動目標の明確化	対象地域との共通認識・合意形成	農業者・地域のニーズと波及効果	活動方法	総合評価
3.8	3.6	4	3.8	3.8

※評価員５名の平均点

【意見・質疑・感想等】
○遠別町でさつまいもを栽培していることを知らず驚いた。
　このさつまいもは色素を抽出するためだけに栽培しているのか。
→　用途の検討は色々したが、アントシアンとポリフェノールが多いということは、苦みやえぐみがあって食用に向いていない。

前任者が干し芋にしてみたが、加工用のさつまいもの方が向いているということで色素専用となった。

○色素の用途と名称は何か。
→　用途は炭酸飲料の色素が主なもの。
さつまいもの色素というのはまだ新しく、ほとんどの菓子メーカーで赤キャベツの色素を使用している。
販促をしている状況ではあるが、量が少なく輸入ものに負けてしまっているが、国産の色素を使いたいメーカーもあるので、上手く供給できるよう努力しているところ。

○色素を抽出した後の廃材の活用は検討されているか。
→　家畜の飼料にならないか検討しているが、量が少なく牛の飼料には難しい。
養鶏業を始めたいという人がいるので、その飼料にできないかという話もあるが、さつまいもの苗の供給が足りておらず、今年は苗の確保を重点にしており、廃材の活用検討は止まっているところ。

○少しピントがずれるが、地球全体で色々なことを見たときに温暖化や気象変動などが常に頭の隅にあって、その中で作付しているものにどのような可能性があるか、生産者の方を支援される方がいろいろ試行錯誤をしていくと思うが、そういう面での可能性はどう評価しているか。
→　需要と供給という部分で、作っても売り先やそれを活用したいという人がいるかを踏まえて、機械化ができるものなのかなどを検討しつつ、技術や情報を整理して農業者に提示して判断材料にしてもらっている。
需要と供給や生産する上での効率など、そういう部分も踏まえて、農業者がどういう農業をしたいかということで普及センターも支援したいと考えている。

○生産が不安定だが、確実に安定したものにするという取組は本当にすばらしい。
引き続き指導をお願いしたい。

6　意見交換
○今の北海道の酒造好適米は吟風、彗星、きたしずくの３種類がある。
これらは酒造好適米ということで、米の中心に心白という部分があって、そこに麹菌が入るので、良い米作りが求められる。
その中で有名なのは山田錦があるが、山田錦のような低タンパク米が求められているが、増毛町で作る米は、普及員や農家の方の努力により、非常に低タンパクなもので、すばらしいと感じている。
このようなお米を使わせていただき、弊社でも春に全道新酒鑑評会に出品したところ。
道内に１５くらい酒造メーカーがあるが、北海道のお米を使うところが増えてきている。
弊社は全国の金賞を取れなかったが、男山さんが北海道のお米で取ったと記憶している。
北海道のお米は食べてもおいしいし、いいお酒を造ることもできるので、全国にＰＲしていき

たいと思う。

○作物にはその年によって流行があり、例えばサツマイモが流行っているとかがありますので、私たち加工側としてもアンテナを高くもっていたいと思っているが、そこに普及員の方に入っていただき、生産者と加工者の身近な関係づくりというところに一役かっていただければありがたい。

落花生については、漬物に挑戦してみたが、やっぱり殻があるので、どうしても食べづらいということがあって、また作っていただくということであれば、ペーストにして今までになかったようなドレッシングや甘くないペーストなどの農作物を生かした加工をしたいと思っている。

すばらしい普及員の皆様のおかげで、留萌地区の農産物を楽しませていただいていることに感謝を申し上げる。

○ルルロッソ（北海２５９号）という小麦を普及センターや色々な方々に支えられて、１２年間やってきたところ。

担い手不足になってきたということがあって、生産者の方々も８名か９名が栽培しているが、若かった方も１０年以上経過して段々減ってきているという状況にある。

この小麦はどうしてもなくしたくない小麦で、全国的に非常に評価が高く、製品化にしても全国から問い合わせがあり、「大阪から北海道に来たらここに必ず寄る」と言って来た方もいるくらい、ブランド化されてきている。

栽培については、非常に苦労されているということで、面積も低値安定になってきているので、量も少なくなってきている。

このため、遠慮がちに製造しなくてはいけなくなってきている。

裏を返せば貴重な粉というので希少価値が高くなってきているということで、あまりない小麦でこれだけ作っているという付加価値を付けることができる。

しかし、麺以外でいろいろ使えるということで、商品アイデアも考えてはいるが、その先に小麦のことを考えて、これでは足りなくなるとか、この先どうなるのかというところが不安になってきている。

このまま続けたいと思っているが、これに続く新しい小麦を留萌で何かできればいいのかなと、少しはそんな考えもありながら、このブランド小麦が少しずつ留萌の名産になればと思っていますので、ぜひお手伝いをいただければと思う。

○これは完全に勝手な僕の考えとなるが、蕎麦ももちろん必要ではあるが、蕎麦が留萌に限らず全道各地、量は作りやすく、種蒔けば収穫まで何もしなくていいというもので、多分生産過多な状態になっていると思う。

蕎麦を作っている方はほとんどの方が補助金ありきの蕎麦栽培、蕎麦の栽培では儲けようとは思っていないというような形になっているかと思う。

蕎麦ももちろん必要だが、小麦や大豆、大豆に関しても適正な品種に合わせた技術を設定しての栽培を行う必要がある。

水田は水田として畑作も輪作をしていくようにする必要があるが、留萌の土質状粘土地なのでいも類やビートが栽培に向かないので、麦や大豆以外にもう１品必要になってくるのでそこをど

うするか私自身も悩みながらやっているところ。
　最近だと、子実コーンであったり、田畑輪換という意味で、乾田直播を交えて、畑をリセットするというような方法も試しながら、どれが正解かというのもわからないまま普及センターの方にも相談しながら進めていくのが必要なのか、これはもう地域全体で考えていくことなのかなと思っている。

〇先日、地元の４Ｈクラブの皆さんが本校に来ていただき、昨年度、本校と色々な取り組みができたということで非常にいい感触を持たれているので、今後も一緒に取り組みしていきたいということで、ぜひやっていきましょうというお話をさせていただいた。
　僕らが高校の時はプロジェクト活動を頑張ってやっていきましょうが農業高校の大前提というか大黒柱みたいなところで、ずっと進んでいる。
　農業高校はプロジェクト活動だが、普通科の高校もプロジェクトに近いもので「総合的な探求」という取り組みで、似たような勉強や活動をしていきましょうという時代に入ってきている。
　そこに正解はないが、みんなで答えなきものにどのようにアプローチをして、どのように納得感や満足感を得ていけるかというところを、高校生だけじゃなくて地域の方も含めてみんなで取り組んでやっていきましょうというような時代になってきている。
　学校では、高校全体では地学協働という言葉が頻繁に使われるようになってきているので、学校だけで教育できる時代は終わり、地域の方や産業界の方、手をつなげるところはありとあらゆるところで手をつないで、とにかくこれからのいい社会つくっていきましょう、ということで進んでいる。
　農業高校といえば農業クラブと限定されるが、高校あるいは小学校中学校も含めて教育をする場の全体像から見ると、そういった探求的な勉強など、地域と学校が共同になった取り組みにみんなで進んでいけるようになればありがたいなというふうに思っているので、ぜひご協力をお願いする。

7　特に評価できる内容や改善すべき内容、意見、感想
・本業は酒造であるが、与えられた米から作るだけでなく、こういった説明を聞いたことにより、非常に勉強になり、やりがいを感じた。
・担い手育成について、冬にある発表会に２年ほど出席させてもらったことがあるが、若い人たちが一生懸命勉強して頑張っていることを肌で感じているので、このまま活動を継続していってほしい。
・色素用さつまいもについて、生産が不安定だが、確実に安定したものにするという取組は本当にすばらしいので、引き続き指導をお願いしたい。

8　今後の対応
　今回の懇談会で頂いた意見は、今後の活動や次年度の普及計画に反映していきます。